

令和6年度 府立桃山高等学校(全) 学校経営計画(スクールマネジメントプラン) (実施段階)

学校経営方針(中期経営目標)	前年度の成果と課題	本年度学校経営の重点(短期経営目標)
○文武両道・自主自律の校是のもと、学習と部活動の両立を図り、知・徳・体の調和のとれた創造性あふれる心豊かな人間の育成を目指す。 ○SSH3期目の指定のもと、SSHを本校の中核的な取組とすることで、教育活動の充実を図り、資質・能力「5C」(*)を身に付けた、次世代社会を創造し牽引するグローバルサイエンス人材の育成を目指す。 ○公立高校の中核校として、次代を担う人材の育成を図るとともに、府民の期待に応える学校づくりを推進する。 ○新学習指導要領を踏まえた教育活動を推進する。	(1) 「自主自律・文武両道」など、本校の特色や教育理念、またSSH3期目の指定校としての取組等を統括し、中・高・高3学年の各学年で、前年度に引き継ぎ、学習意欲が高まること、本校の様々な取組に高い関心をもち、入学生・保護者を迎えること、入学生・保護者の期待に応えること、さらなる学校の魅力向上に努めたい。 (2) SSH事業において、普通科・自然科学科とも学校設定科目「グローバルサイエンス探究」の成果が顕著なことで、探究的な学びが進展し、その成果がSSH指定校としての資質・能力の育成につなげられている。次年度は第4期SSH指定校として、探究的な学びをさらに充実させること、将来的に自走できるような教育課程の研究開発を推進する。	(1) 「主体的学習者」の育成に向けて、「主体的・対話的で深い学び」への授業改善、学びにおける「個別最適化」した学習指導や「協働的な学び」について研究・実践を進め、桃山高校の学びのデザイン再構築を行う。 (2) より高みを目指す進路目標にも主体的・積極的にチャレンジシていくことができるよう組織体制の確立や、生徒の意欲に火をつける学習・進路指導を継続して展開する。 (3) SSH3期5年目である今年度も、「資質・能力5C」を身に付けた、次世代社会を牽引するグローバルサイエンス人材の育成」という目標を、教育活動全体に落とし込み、4期目指定獲得に向けて全校体制で実践していく。
*5C 本校では、グローバル化とサイエンスの発展が重要となる次世代社会において、国際的に活躍し得るグローバルサイエンス人材に必要な資質・能力を、以下の5項目として育成を目指している。 ① Critical thinking and problem solving (批判的思考力と問題解決) ② Creativity and innovation (創造力と革新) ③ Collaboration (協働性) ④ Communication (コミュニケーション力) ⑤ Challenge (挑戦力)	(3) 組織的な教科指導や進路指導の実施に努め、進路実現に向けて、学校全体で最後までの大学に、多くの生徒が現役合格でき、難関大学へも積極的にチャレンジシていく。今後は、生徒の学びの志向性にさらさら刺激を与え、より高みを目指す進路目標にも積極的にチャレンジシていく。今後は、生徒の意欲に火をつける「主体的学習者」の育成につなげるキャリア教育を継続していきたい。 (4) 新学習指導要領や新しい大学入試制度に対応するため、「主体的・対話的で深い学び」への授業改善、記述力や英語の4技能の向上に向けた取組など、組織的に計画的に取組を推進することができ、今後は生徒の多様性に目を向け、「ICTを活用しながら「個別最適化した学び」や「協働的な学び」を推進していきたい。	(4) 生徒が主体的に「夢・感動・挑戦」の舞台を創り上げることで、次世代社会を牽引する「学校行事」の検討や、生徒が自ら高みに挑戦することによって実現する「高いレベルでの文武両道」への仕掛け作りを行っていく。 (5) 教職員自身が桃山高校生にとつてのロールモデルとなることを目指し、桃山高校働き方改革を進めることにも、高いコンプライアンス意識をもつて教職員集団を形成できるよう努め、生徒にとつても教職員にとつても魅力ある学校を作る。 (6) スクール・ミッション、スクール・ポリシーを踏まえて教育活動を行い、その活動の内容を学校内外に戦略的に広報すること、魅力・特色を府民に発信し、選ばれ続ける学校づくりを推進する。

令和6年度学校経営計画

領域	重点目標	具体的方策	評価			最終	成果と課題
			中間				
教務部	「主体的学習者」の育成のための教育活動や授業改善の取組を支援する。	新学習指導要領の完成年度及び第4期SSHの指定に向けて教育課程を点検、見直しをする。	B		A	A	令和8年度入学生への教育課程を教科主任会議を通じて十分な検討を行い変更案を作成した。 各教科前に成績不振科目を多く抱えている生徒の一覧を作成し、教科と連携をして補習計画を立てた。 年間に2回の公開授業週間を設けた。
		学年部、保健部及び各教科と連携し、特に学習に際して課題を抱える生徒に対して、補充等を通じてきめ細かく対応する。	B	B	A		
		公開授業などを通じて「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の推進を、教科をこえて共有する機会を設ける。	B		B		
生徒指導部	生徒が主体的に「夢・感動・挑戦」の舞台を創り上げることができるような「学校行事」の検討や、生徒が自ら高みに挑戦することによって実現する「高いレベルでの文武両道」への仕掛け作りを行っていく。	生徒にわたってスポーツを通して能力や態度を培う。生徒会を中心に、生徒全員の創意工夫を生かした主体的な取り組みを行い、良き伝統を継承し、時代に合った新しい魅力を作り上げていく。	A		A	B	学校等の行事での生徒の成長に一定の成長を上げることができた。生徒会を中心に生徒の主体性を発揮した委員会運営や、新しい魅力を作り上げることに注力した。 また、日々の生活指導（挨拶・マナー・対話・励まし・問題行動等）を大切に、生徒指導部が顧問教師・一人一人の生徒への安心・安全な学校づくりを徹底した。 複雑化する困難課題対応型の指導（特にSNS等）についての内規の整備や最新の指導の方法など、時代に合った支援や働きかけができるよう他方策とも協働し、考えをいきた。また、教職員の共通認識、部活動・部活動を含めた生徒指導マニュアルの改定・周知を行ったが、タイムリーな場面での活用に至っていない部分と着目・周知の遅れさが課題である。年度当初に新職員研修として、本校生徒指導について共有する機会を設けるなどの工夫を行い、改善を図った。
		生徒の主体性を養い、HR・部活動・生徒会の活動を充実させ、一人一人のキャリア形成を向上させることを目的とする。	B	B	B		
		部活動への積極的参加を促し、加入率の向上と活動実績の広報活動を行う。	B	B	A		
進路指導部	生徒の意欲に火をつけ、生徒一人ひとりがより高みを目指す進路目標にも主体的・積極的にチャレンジできるように進路指導を展開する。	多様な進路実現に向けて、火曜、水曜、金曜の7限の時間を活用し3年生対象の平日学習会を実施する。平日、土曜日、長期休業中などの学習会が、進路実現を目指す生徒の意欲の向上につながっているが振り返る機会を設ける。	B		A	B	昨年度より、生徒の状況及び保護者負担の軽減等の観点から模試を精選して実施した。模試の事後活用については、学年部主催で教員向け分析会を実施していたが、生徒への事後指導については、外部講師による講演会後の取り組みについて、学年部と協力しながら調整することができた。年度以降の課題である。 ・生徒の使用する一人一台学習用端末からiPadに更新されたことに伴い、新入生の端末の運用上の注意や導入までの手順などを整理した。また、学習用端末を使用する学年が初めて卒業することから、年度末の端末の初期化手順などについても整理し、それに伴う必要事項の整備も進めた。 ・教員の使用するP.C.、タブレット端末については、年度ごとのデータ整理などのルールを明確にし、引き継ぎが円滑なく、確実に実行できるように改定した。 ・iPadをプロジェクターに接続する際に必要になる接続アダプターなど、使用頻度が高い機器を中心に整備を進めた。 ・ICTに関する研修については、年度当初の端末利用に関する研修会の実施などとなった。Classiを通じて、知時必要なLIPSを配信したが、浸透率はまだ高いといえない。 ・参加者アンケートより、生徒が登壇する企画の入場が難しいことがわかった。そのため、今年度は令和6年度より増えた「6期生研修」の参加者による参加レポートを新たな企画として実施した。参加者アンケートでも好評だったため、今後も継続していきたい。 ・ホームページに関しては、昨年度更新が滞っていた部活動紹介ページを全クラウド更新することができた。全体的な記事の投稿については、分掌・担当制による更新体制に大きな改善が見られたため、投稿が少なくない、あるいは全く更新がないという状況が改善された。また、更新頻度を高めるべく、更新頻度を高める

令和6年度学校経営計画

領域	重点目標	具体的方策	評価			成果と課題
			中間	最終		
保健部	生徒の多様性に適応できる学校環境の整備	学校不遇感に心配される生徒の学校生活への適応を支援するとともに、気にかかると生徒の早期発見・早期対応に努める。 特別支援教育の個別支援を要する生徒について適応対策会議を通じて状況の共有を図る。 学習環境のユニバーサルデザイン化を進めるとともに、環境美化に努める。	B	A	B	・学校不遇感に心配される生徒の中には、発達特性に問題を抱えている可能性が否定できない。学年部と保健部、また外部機関とも連携し問題の早期発見・早期対応に努めた。 ・特別支援教育の個別支援計画作成対象生徒について、適応対策会議の中で状況確認ができた。 ・誰にとっても過ごしやすい学校環境作りを推進できた。
			B	B		
			B	B		
図書部	「5C」を身に付けた人材の育成、「主体的学習者」の育成に必要な桃山高校の「学び」を探究する。	図書委員会による自主的、積極的な図書館運営（班活動、読書月間における各種行事の立案と実践など）を行う。 探究をはじめとする各授業での図書館の活用や、教職員の図書推薦などの様々な仕掛けを試みる。 「5C」に関する図書充実させるとともに生徒に向けて紹介する。 学習活動を通じて個々の生徒の特性を把握し、個別最適化した学習指導、生活指導を充実させる。それにより、生徒自身が主体的に読書活動でできるような指導を目指す。 担任が生徒たちの思いを聞き出すことを大切にすることで、生徒たちひとりひとりに相談することの重要性と話を聞く姿勢の大切さを実感してもらい、生徒たちのつながり力の成長を促す。	B	A	B	・図書委員は主体的に図書館運営へかかわることができた。今後でもさらなる活動の発展に努める。 ・図書館は年間を通して探究をはじめとする各授業で活用された。また、読書月間の取組として、教職員・生徒から原稿を募り、図書推薦冊子を作成した。 ・「5C」を身に付けた生徒の育成に向けて、図書の充実、読書活動の啓発に努めたが、まだ改善の余地がある。
			B	B		
			B	B		
第1学年部	桃山高校での生活を通して、主体的に行動できる生徒を育てる。 さらに人とのつながりを大切にし、協働して取り組むことで共に成長し合える集団を作る。	学習活動を通じて個々の生徒の特性を把握し、個別最適化した学習指導、生活指導を充実させる。それにより、生徒自身が主体的に読書活動でできるような指導を目指す。 担任が生徒たちの思いを聞き出すことを大切にすることで、生徒たちひとりひとりに相談することの重要性と話を聞く姿勢の大切さを実感してもらい、生徒たちのつながり力の成長を促す。 学校行事、LHRを集団がさらに成長するための機会であると捉え、学年通信等を通じて他者の視点から行事を振り返ること、集団への帰属意識を高める。	B	B	B	・定期的に生徒との面談を行い、生徒たちの思いに寄り添いながら、各担任が様々な丁寧な学習指導を実施した。 ・大学や学部進学のための進路指導に留まらず、キャリア教育という観点から、社会に出た自分をイメージできるような取り組みを実施した。 ・生徒の進路希望に合わせた2年次の進路指導をすることができた。 ・社会の変化に伴い、様々な課題を持つ生徒に対しては、生徒自身を尊重する立場に立って例年以上に注意深く見守る必要があると感じている。 ・講演会やSSH、探究の取組等は、これから自分自身が社会とどう関わっていくのかを考える良い機会となったが、それが生徒の意識の中でまだまだ一過的なものになっている。
			C	C		
			C	B		
第2学年部	桃山高校での生活を通して、主体的、自律的に行動できる生徒を育てる。	ホームルームや面談などを通じて、個々の生徒の特性を把握し、個別最適化した、学習指導、生活指導を継続的に行うことを目指す。 生徒たちが、進路実現までの2年間に見過ごしを待たず、主体的に進路選択ができるような指導を充実させる。特に進路実現に向けた課題設定を、生徒たち自らが行うような仕組みを作り、主体的な学習行動を促す。 関係分掌と連携し、ホームルームや個人面談など、あらゆる教育活動の場面で、生徒集団や個々の生徒とのコミュニケーションを継続的に図り、希望進路の実現のため、主体的、意欲的な態度で学校生活を過ごすことができるよう指導する。	B	B	B	・三者面談、個人面談や学年集会を実施し、生活面や学習面の指導を行った。また学年会等を通して各クラスの生徒個々の変化や情報を共有し、教員交換を行い、ホームルーム運営に役立てた。 ・研修旅行については、無事終えることができた。生徒達の満足度も高かった。 ・進路については、進路指導部と連携した説明会の実施や、志望理由書模試に向けての活動を通して、各自の進路を考えていく機会をつくった。今後、最終学年での進路実現に向けてより一層進路の研究を深めていくことが課題である。
			B	A		
			B	B		
第3学年部	望ましい社会人となるための資質、能力を主体的に伸ばすことができるよう、自らの将来を展望し、目標実現のための努力を継続できる力を育てる。	関係分掌と連携し、ホームルームや個人面談など、あらゆる教育活動の場面で、生徒集団や個々の生徒とのコミュニケーションを継続的に図り、希望進路の実現のため、主体的、意欲的な態度で学校生活を過ごすことができるよう指導する。	B	B	B	・新課程入試に臨む初めの3年生として、面談やホームルーム活動などを通して、生徒一人一人の資質、能力を生かす指導が展開できた。今後は、さらに指導の成果を各分掌と綿密に共有し、進路希望の実現に一層寄り添える取り組みを進める必要がある。
			B	B		
			B	B		
事務部	分掌、教科等と連携し、予算を効果的に運用するとともに、行政的な立場から教員に寄り添った学校運営、教育活動を推進する。	校内における危険箇所、不具合箇所について迅速に対応するとともに生徒、教職員の安心・安全に向けた施設・設備の整備・充実を図る。 長寿命化改修工事による教育活動への影響を最小限にするとともに、ICT機器の利活用を推進するための教育環境整備に努める。	B	B	B	・突発的な修繕等は迅速に対応することができたが、経年劣化による施設の不具合や抜本的な改修を要する箇所については、整備には至らず管理運営への要望にとどまった。 ・長寿命化改修工事は関係分掌、教科等への調整を丁寧に行ったものの、施工業者や管理課との連携が不十分であったため施工状況等を適切な周知することができず、生徒・教職員に一部負担を強いることとなった。
			B	B		
			B	B		

令和6年度学校経営計画

領域	重点目標	具体的方策	評価			成果と課題
			中間	最終	最終	
国語	国語での的確に理解し、効果的に表現する資質・能力を育成する。	ICT教材を積極的に活用しながら、生徒にわたって主体的に学んでいく学習者の育成を行うと同時に、生徒の多様性に配慮した学習指導や、「協働的な学び」について研究・実践を重ねる。	B	B	B	情報端末を使って収集した多様な情報や即時性のある情報を手がかりとして、主体的に学びを深めていくきっかけとすることができた。グループワークにおいてはロイノノートを使って協働で意見整理をさせ、学習内容を深めさせたことができた。研究会に積極的に参加して共通テストの過去問題の分析や新傾向問題の情報を収集し、教科内で共有しながら教材の選定を進め、授業の展開を工夫した。すべての学びの基礎となる国語力のさらなる育成を図ることが課題である。
		全学年で実施されている学習指導要領や大学入学共通テストについて研究を進め、生徒の国語力育成に還元すべく、教科内で情報を共有する。	B	B	B	
地歴公民	興味・関心と学習意欲を高め、自ら学びが、考えられる力を育成する。	板書、プリントを充実させ、資料（写真、統計、史料等）や視聴覚教材を有効に活用する。	C	B	B	板書（電子黒板）、授業プリントの充実をはかり、資料（写真、統計、史料等）、視聴覚教材の有効な活用に至った。今後も更に効果的な教材の開発を進め、その共有を進めていきたい。
		ICTを活用した授業や「協働的な学び」を模範とした授業を研究・実践し、「主体的・対話的で深い学び」による思考力・表現力等の育成を図る授業改善に取り組む。	C	B	B	電子黒板のより効果的な活用のための情報交流に努め、ICTを活用した授業の構築に取り組んだ。今後も各教員が各自、各科目の課題改善に向けた研修を続けることともに、教科としてのICT教材の充実を図りたい。
数学	学習意欲の向上を基盤にした主体的学習者の育成を目指す。フロー・バルサイエンス探究との相互の連携を図り、論理的思考力の獲得を通して表現問題に積極的に取り組む態度を養成する。	小テスト、定期考査、模擬試験の到達度目標を早期に提示すること、学習計画の作成を習慣化させる（手帳およびチャートブックの活用）、目標へ向けた取り組みの過程においては、多様な生徒に合った学習方法の提案や長所を生かすような指導方法を検討する（個別最適化）。また、できるだけ多くの生徒に数学検定の受験を推奨し、習熟度の高い生徒へ向けには数学オリンピックや数学コンテストへの参加を促して数学の楽しさや深く考える面白さに触れる機会を提供する。	B	A	B	・定期考査範囲のチャートブックシートを早期に提示し、授業の中で指示・活用することにより、生徒が小テストや定期考査、模範解答などにに向けて目標設定や学習計画立案に取り組む。日教例に準拠し、取り組み姿勢を促した。 ・数学検定の校内外団体受験を2回実施し、1回目は3年生75名が受験し、2回目は1、2年生10名の申し込みがあった。 ・数学オリンピック予選には8名が参加した。 ・1年生自然科等科では、夏に神戸大学数理・データサイエンスセンターの第4回中学生・高校生データサイエンスコンテストに全員参加した。 ・libry・Geogebra・grapesなどを相互利用して深い学びや対話的な学びを実践し、授業の深める工夫や効果については、概ね現段階の目標を達成した。 ・ICTやAIの授業における活用については今後も研究し、教員間で情報や教授方法を共有する必要がある。 ・新学習指導要領による指導計画や評価については、継続して教科内で検討する必要がある。とくに、考査に類しない評価の仕方は、日常的な学習活動をどのように評価するかは早急な検討が必要である。
		深い学びにつながる教授法や授業教材の活用を継続して検討する。また、ICTを用いて生徒のレポートや演習課題等の生徒間共有を図り、ペアワークや探究活動を通して数学的、論理的思考力を磨く。	B	B	B	
		新学習指導要領完成年度を迎え、教育課程および指導計画や評価の方法（従来の評価と観点別評価の整合性）について2年間の実績を基に検討し、問題点を共有して改善する。	B	B	B	
		思考力・判断力・表現力を育むための実験・実習を積極的に行う。	B	B	B	
理科	協働的な学びや見通しをもった実験の実践を通して科学的に探究する活動の充実を図り、主体的学習者の育成及び学力向上につなげる。	観点別評価法をさらに研究し、「指導と評価の一体化」の観点から、授業改善を行う。	C	B	B	各講座、生徒の思考力・判断力・表現力を育むために有効な授業および実験を積極的に実施できた。特に、教員間で意見交換を積極的に行い、これまでの実績を改良できた例も見られた。教科内で課題を共有し、授業改善に繋げられた。教科公開授業では、理科教員同士で積極的に授業を参観し合い、互いに授業力向上を図れた。来年度以降、他教科への積極的な授業公開を図り、広い視野で授業力向上に努めたい。
		教材や授業を教科内外へ公開し共有する。	B	B	B	

令和6年度学校経営計画

領域	重点目標	具体的方策	評価			成果と課題	
			中間	最終			
保健体育	体育・保健の見方・考え方を働かせて課題を発見し、合理的、計画的な解決に向けた学習過程を通して、心と体を一体として捉え、生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを継続するための資質・能力を育成する。	具体的な知識と汎用的な知識とを関連付けて理解できるようにすることと、科学的知識を基に技能を身に付けることでその理解を一層深める等、知識と技能を関連させて指導する。また、技能の向上に向け、ICTの有効活用を積極的にとおっていく。	A	A	B	体育においては、具体的な技能向上及び戦術・作戦・戦略についての知識を与え、グループワークや振り返りシートを活用し、技能の向上とチームワークの醸成を図った。今年度は、全学年の授業においてICTの有効活用ができた。知識の理解とともに、技能の向上にも一定の成果を上げることができた。	
		自己や社会の課題を発見し合理的、計画的に解決することや、新たな課題の発見につなげたり、根拠を示したり他人に配慮しながら言葉や動作などで即座に表したり、図や文章及びICT機器等を利用して助言を立てて伝えることができるよう指導する。	B	B	B	B	保健授業においてもICTを充分に活用する授業を展開できた。自らの健康に関する課題や社会における健康問題を発見し、解決に向けた活動を通して思考・判断力を身に付けさせた。また、発表活動を通して他者に配慮しながら自らの健康や社会における健康問題について、主体的に考える力を身につけさせた。
		愛好的態度及び健康・安全、公正、協力、責任、参画、共生について、汎用的な知識を関連させて指導することと、主体性を促し、生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現していく資質・能力を育成する。	B	B	B	B	体力の向上を重視し、心身の状況に応じて自ら体力を高める方法を身に付けさせた。生涯にわたって体力の向上を図り、心身の健康を保持増進し続けるために、運動を継続的に取り組ませる資質・能力の更なる育成が課題である。
芸術	音楽：学習指導要領の趣旨を踏まえた学習指導の徹底を図るとともに、本校生徒の実態に即した授業展開の工夫に努める。 美術：授業と評価の一体化をふまえた授業計画を立て、その趣旨を理解した主体的な学習者の育成を図る。 書道：書に親しむ活動を通して、感性を高め、書字能力の向上を図り、主体的な学習者の育成に向けた授業展開を行う。	主体的に音楽に関わり、感受する力の育成に資するため、生徒相互による批評活動を積極的に取り入れるとともに、タブレット端末の効果的な利用を通して、個性的な音楽表現の向上を図る。	B	B	B	生徒相互の発表による批評活動を通して、主体的な学習成果を得ることができた。タブレット端末の活用については、リズム創作活動に取り入れられることで、一定の成果を収めることができた。	
		課題のテーマや評価観点を具体的に示すと共に自分の創作活動を客観視するために生徒相互の評価活動を授業内に組み込むような授業計画をたてる。	B	B	B	B	昨年度に続いて「抽象」をキーワードに年間の授業を計画した。抽象化について、また抽象的な美しさについて考える中で、具体的な事象から普遍的な問題意識を抽象化した上りする観点が見られた。具体的方策に書いた内容については、生徒の相互評価に関する活動の部分ではやや弱かったように感じる。
		基礎・基本を身に付け、「表現」「鑑賞」の学習内容に、批評活動を積極的に取り入れた授業展開を行う。	B	B	B	B	相互発表等の活動を積極的に設定し、表現、鑑賞の各分野で一定の成果を収めた。一人一台端末の活用については、授業記録や作品提出などを行なったが、電子黒板等が未整備であるため、活動成果の共有などに生かされていないことが課題である。
英語	授業、家庭学習を通して、主体的に英語力向上に取り組めるよう、ICTを効果的に活用するとともに、1年間の学習計画と効果的な学習方法を明確に示す。 英語学習における「主体的学習者」を育成する。	授業、家庭学習を通して、主体的に英語力向上に取り組めるよう、ICTを効果的に活用するとともに、1年間の学習計画と効果的な学習方法を明確に示す。	B	C	C	過度に生徒の自宅学習に頼らず、生徒が時に困難しながら思考したり、作業する時間を増やすことで主体的学習を促す取り組みを増やすことができた。ICTを活用し、自宅でも学習に貢献する教材の共有や、自宅からの提出を求め、双方向型の学習も実現できた。	
		教員による解説を簡潔にし、ペア・グループワーク、パフオーマンステスト等を通して、生徒の英語の発話量・読解量・活動量を増やす。	B	B	B	B	また、探究活動と運動しなから積極的に英語を使う機会を増やした。単に準備した学習を暗記するのではなく、即興で質問に答えたり、議論すること、日々学習している知識を積極的に活用する取り組みも実現できた。今後は、自立した学習者の育成に向けて授業で何を求めるのかを更に追求する必要がある。また、表現活動については、生徒同士の活動の質を高める工夫を考える必要がある。
		パフオーマンス課題をさらに推進し、自己表現や学習成果のアウトプットとして生徒が主体的に取り組み、英語を使う楽しさを感じられるようなパフオーマンス課題の仕組みをつくっていく。	B	C	C	C	

令和6年度学校経営計画

領域	重点目標	具体的方策	評価			成果と課題
			中間	最終		
家庭	人の一生と家族・家庭及び福祉、衣食住、消費生活などに関する基礎的・基本的な知識と技術を総合的に習得させ、家庭や地域の生活課題を主体的に解決するとともに、生活の充実に向上を図る能力と実践的な態度を育てる。	講義や実習・実験を通して、家族の健康と衣食住についての知識を身につけてさせ、実践する力を育てるように指導する。清潔に衣服を管理し、時には取れたボタンをつけ補修する指導のため、裾股製作実習を取り入れる。	C	B		・食生活分野では、高校卒業後の生活の中で朝食の欠食が増加する現状と問題点や、中食を利用する際の注意点など、一人暮らしと食生活の課題を考えた上で、調理実習の実施はできたが、一人暮らしの時に再現可能な簡単なメニューとなり、調理技術を身につける方法に課題が残る。 ・経済分野では成年年齢が18歳に引き下げられたことから、家計(収入と支出)の構成や、奨学金に關してなど、成年として生活する権利と責任について理解することができた。実習をめぐって困ったことが生じた際対応など、動画を通して学習しイメージができた。 ・被服製作では、①は縫い「ハ」半返し縫い「本返し縫い」「かがり縫い」を取り入れ、これからはミシンを持たない一人暮らしでミシン等の道具がほしい時「ハ」のかがり縫いなど縫製し刺し子を利用しながら簡単な入れができるよう、「リバーシブル」のツクカパーを作製した。結果として、ほとんどの生徒が非常に積極的に取り組みることができている。 ・保育分野では、赤ちゃん人形を使用し子どもを抱くときの注意点を体験することができた。また、遊びを通して乳幼児の発達を知ることができた。今後の課題として保育体験が実施可能であれば、体験をすることで、理解を深められる。
		乳幼児と高齢者の生活や福祉について、ライフステージごとの心身の変化を「シニア体験」「マタニティ体験」実習により理解を深める。	B	B		
		副教材等への継続的な取り組みを通して、情報に関する知識理解を深めるとともに、学習の手法等を体験的に習得する。	B	A	B	生徒が各教材を計画的に活用することを促すことで、基礎・基本的な知識や技能、さらには情報社会に参画する態度や姿勢について修得させることができた。 学習内容や単元によっては、生徒が主体的に学習テーマの設定をするということが困難であった。
情報科	新学習指導要領の趣意な実施により、情報と情報技術を活用する力と情報社会に参画する力を養う。教科の教育活動を通して学びの自己調整能力を養い、生徒の実践的な情報活用能力を育てる。	副教材等への継続的な取り組みを通して、情報に関する知識理解を深めるとともに、学習の手法等を体験的に習得する。	B	B		・昨年度に引き続き、探究通信「週」を定期的に発行し、桃山高校3年間の探究的な学びの内容を校内・校外問わず発信・周知することができた。 ・GS探究Ⅱで研究論文の作成を前倒しすることで発表や成果物がより効果的なものとなる工夫を行った。GS探究Ⅲについては、ディベートを導入することで、正確な社会課題について本校で3年間学んだことをもとに考えを整理することができた。特に普通科文系では、英語でのディベートを実施することで、英語を用いて自身の考えを発信することにも他者と意見を聞く力を育成することができた。これらの取組の改善により、GS探究を柱とした3年間の探究的な学びのキャリアプログラムがより体系的で効果的なものとなった。 ・各教科・分掌と連携してSSH科目に向けたカリキュラムの検討と作成を行った。
		探究的な学びを通して、予測不能な時代を生き抜くために必要な資質・能力「5C」の育成を図る。またSSH4期目申請に向け、申請内容について全教職員が共通認識を持ち、全校で探究的な学びを実施する体制づくりを行う。	B	B	B	
		探究的な学びの目標と照らし合わせ、各学年の教材や探究の発表・まとめ等のあり方について見直し、改善していく。	B	B	B	
グローバルサイエンス		SSH4期の申請に向けて、職員会議での研修や協議・公開授業などを通じて申請内容や目指す生徒像を教職員全体へ周知し、探究的な学びを通してキャリア観の形成等について共通認識を作る。	B	B	B	

学校運営協議会 による評価	・学校経営計画に沿って順調に教育活動が進められている。 ・SSHを一つの軸として教育活動の質を高めている。 ・生徒たちの自由な発想に柔軟に対応できる教職員のしなやかさが必要ではないか。 ・保護者対象の学校評価アンケートの結果を見ると、学校の実施している教育活動の内容を十分に広報できていないのではないかと感じる。ホームページやSNS等を活用し、在校生の保護者や、志望校を検討している中学生・その保護者に対して、さらに情報提供に努めることが今後求められるのではないか。 ・学校美化、教育環境の整備という面においては、長寿命化工事は大きく評価を下げる要因となっていると考えられる。今後とも安全かつ速やかに工事を進めていただきたい。
次年度に 向けた改善の 方向性	・生徒会のInstagramをとおして、桃山高校の魅力をタイムリーに発信していく。 ・「自走する学習者」を育成するために、ICTの活用等を含む、教員の授業改善をさらに推進する。 ・生徒が安心して本校で教育を受けられるための環境整備を行う。 ・教職員の働き方改革・改善を目標とした業務の精選をさらに推進するとともに、各分掌業務が前年度踏襲にならないよう努める。